
魔法先生ネギま ~ 最強最悪の転生者 ~ renewal

RYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま 最強最悪の転生者〜renewal

【Nコード】

N4558S

【作者名】

RYO

【あらすじ】

ある日、一人の少年が死んだ。理由は簡単、車にはねられて死んだ。ただそれだけだった。

しかし、本来その少年は死ぬ運命ではなかったはずなのに死んだ。それを見かねた神が彼を別の世界へ転生させてやると言ってきた。彼はそれを受け入れおまけとして力をもらった、それはめだかボツクススの全異常と全過負荷が使える力だった。その力を貰い彼はネギまの世界へと転生するのであった。

始まり

とある朝、少年は自分の部屋で寝ていた。その少年は「んん」といつて布団の中から手を伸ばしジリリリと鳴っている目覚まし時計を止めた。

「ふあゝあ。今日もめんどくさい一日がはじまんのかゝ、鬱だ」なんていうネガティブなことを朝っぱらからいう少年がこの物語の主人公、近衛龍輝。彼は転生者でもありここ、近衛家の長男でもあり、そして関西呪術協会の次期長でもある。しかし本人には長になるつもりはなく彼の妹、近衛木乃香にその次期長になる権利を与えてしまった。もちろんこれには反対した者もいたがそれらはすべて竜輝自身が話（又の名を脅し）をして納得してもらった。

「さてと、腹もすいてるし行くか」説明してる間に私服に着替え、自分の部屋を出て彼は居間に向かって行った。

〳〳居間〳〳

竜輝が居間に着くとそこでは一足先に朝食を食べている人がいた。

「おはよう竜輝」竜輝が来たことに気づき挨拶してきたのが近衛家現当主でもあり関西呪術協会の現長でもある近衛詠春だ。

「ああ、おはよう父さん」なんてことないいつも通りの言葉を交わす二人。

ちなみに今の近衛家には竜輝と詠春と20人ぐらいのお手伝いさんしかない。木乃香は現在麻帆良学園で寮生活をしている。

「ああそうそう、龍輝。今朝方お義父さんから竜輝宛てに手紙がき

ただけど、」

「あん？爺さんから？」竜輝は味噌汁を飲みながら答える。

「ええ。これがその手紙です」詠春が懐の辺りを探って手紙を出した。

「どれどれ、」竜輝は一旦、箸をおきその手紙を読んでみた。

『竜輝へ

麻帆良学園に来なさい

爺ちゃんより』

「……………マジか」

「こうして竜輝は麻帆良学園に行くことになった。

始まり（後書き）

前に書いていた小説を新しく書き直したものです。今度はちゃんと完結できるように頑張りますので応援よろしくお願いします。感想などもどんどん送ってきてください。それでは！

準備そして別れ

どうも皆さん、近衛竜輝です。

今、俺は近衛近右衛門という糞爺から『麻帆良学園に来なさい』なんていう手紙を貰って麻帆良学園に向かう準備をしている最中だ。それにしても、、、、

「いきなり『来い』だなんて、、。何が目的だ？まあ何にせよ、あの爺に会ったらまず螺子をあの長い後頭部に何本も刺して、『致死武器』でいままで受けてきた傷跡を全部開いてやる。くくく、想像するだけで楽しくなってきたなあオイ。」なんてブラックなことを言いつつ竜輝は準備を終えていた。

「竜輝。準備はできましたか？」そういつて詠春が竜輝の部屋に入ってきた。

「ああ今終わったところだ。」

「そうですか。それでは、、、、」

「ああもう行くぞ。」

「寂しくなりますね。」詠春が悲しそうに言う。

「文句ならあの爺さんに言うておいてくれ。まあ一週間に一回ぐらいは手紙だすからよ。」

「ええ、わかりました。それと木乃香と刹那君によろしくと伝えておいてください」

「わかった。それじゃあな、父さん。」

「違うでしょう、竜輝。」

「え？」

「『』いってきます』でしょうっ？」

「、、、ああ、そうだったな」

竜輝は詠春の顔を見て改めて言っ。

「いってきます。父さん」

「いってらっしゃい。竜輝」

準備そして別れ（後書き）

感想お待ちしております。

到着

「おお〜ここが麻帆良学園か、デカいな〜」

俺は京都から新幹線やら電車やらを使ってここまで来た。

「ここではどんな面白いことがあるのかね〜、楽しみだよ」くくく、と小さな笑いをこぼしていると、

「貴方が近衛竜輝様ですか？」と俺の後ろから長い黒髪の俺と同じ位の年の女の子が俺に話しかけてきた。

「誰だあんた？」

「申し遅れました、麻帆良学園学園長の命により貴方様を迎えに上がりました。」

どうやら彼女は俺を迎えに来たらしい

「さあ学園長が首を長くしてお待ちになられています。行きましよう。」

長いのは頭だけにしてほしいのだがな、などと思いながら俺は彼女の跡をついていくことにした

〜〜学園長室前〜〜

「ここが学園長室です。この中に学園長がいるはずですので、

「ああ、ありがとう。それとちょっと扉の前から離れてくれるかな」?

「?ええ構いませんが、

「テメー何回も木乃香に見合いさせてるぞっじゃねーか」

「ギク!! な、なんのこじじゃ?」

「あくまでしらばっくれるつもりか、ならこちらにも考えがある。」

到着（後書き）

遅くなってしまう上に中途半端なところでおわってしまい申し訳ございません。この続きは必ず明日には書くつもりです！！あと今回出てきたオリキャラの名前を募集します、それとオリジナルの能力も募集していますので皆さんどうかご協力お願いします。

仕置きそして本当の理由

「『致死武器』、、、発動」

俺はこの爺に灸をすえさせるためにこの過負荷を発動させた。ちやんと発動した証拠に爺の体の至る所にある古傷から血が噴き出ている。この過負荷はどんなに小さな傷でもその傷を生傷へと変えることができる。つまり、傷ができたらできたただ俺にとっては有利になる。爺のような人間であるならなおのことだ。

「く、、、」

爺は苦しそうな顔をしながらなにやら魔法の詠唱をしているが多分回復系の魔法だろう。無駄なことをするものだ。たとえその魔法で傷が治ったとしても治った端からまた傷が開いてくる。ずっとこれの繰り返しだ。

「どつする爺？もう木乃香に見合いをさせないというのであれば止めるが？」

「、、、、わかった。もう木乃香には無理やりには見合いはさせん」

「その言葉本当だな？」

「うむ、近衛近右衛門の名にかけて」

「わかった」

俺はそういつて『致死武器』をといた。

「あとは回復魔法でもかけて治しとくんだな」

俺はそう言い残してこの部屋を出ようとしたら、

「竜輝よ、今日の夜に世界樹の前にきてくれんかのう」

「何でだ？」

「ここ麻帆良学園の魔法生徒及び魔法先生にお主を紹介したいのじやよ」

「なぜ俺を紹介するんだ？」

「それはもちろんお主が明日からここに通ってもらい、ここ警備をしてもらうからじゃ」

「……………は？」

仕置きそして本当の理由（後書き）

まだまだオリキャラの名前やオリジナルの異常、過負荷を募集しています。皆さまどうかご協力お願いします。私だけではなかなか考えられないので皆さまのお力をおかしく下さい。本当、マジで。

自己紹介そして再開

「はあ」

はい、みなさん、こんにちは又は又はこんばんは。なぜ初っ端から俺がため息を吐いているのかと言うと、、、

「あの爺、警備なんかさせるために俺を麻帆良に呼んだのかよ」

そう、どうやら爺は俺に麻帆良学園に通いながらここの警備をさせるためだけに呼んだらしい。まあでも、これはこれでいいのかも知れない。数年ぶりに木乃香や刹那にも会えるし、口うるさく「次期長になるのをもう一度考えてください」なんていうのを周りから言われなくて済むしな、あいつら一回話し（という名の脅し）をしたつてのに未だにしつこく言うからなく、マジでウザかった。

「さて、そんじゃま夜になるまで世界樹の枝の上で昼寝でもしとくか」

そういつて俺は世界樹の方まで行って枝に飛び乗り昼寝をする。

サアアアアア

「、、、、、、、、いい風だな、心地よく眠れそうだよ」

その言葉を最後に俺は目を閉じた。

そして夜、世界樹の前にある広場にはここ麻帆良学園の魔法先生及び魔法生徒が集まっていた。

「学園長、我々に紹介したい人物はまだ来ないのですか？」
眼鏡をかけた黒人の魔法先生ガンドルフイーニが学園長にそう言った。

「ぬう、おかしいのう。もう来てもいい時間帯なのじゃが、、、」
「俺ならここにいるぞ、爺」

『！？！』

その場にいた全員が声をした方を向くとそこにはつい先ほどまでいなかったはずの知らない人物が立っていた。ただ一人を除いて、、、

「りゅ、竜輝様！？」
そう刹那である。竜輝と刹那がこうして会うのは約2〜3年ぶりのことである。

「よう刹那、お前はまた一段と可愛くなっただな」
そう竜輝が言った瞬間、刹那の顔が茹蛸のように赤くなった。

「か、かかかか可愛いつて、、、」

「本当はこうしてお前と話していたいのだが、その前にやることがあるんでね」
そういつて竜輝は学園長の方まで歩き出して学園長の横に来て歩みを止めた。

「どうもみなさんこんばんは。麻帆良学園学園長近衛近右衛門の孫

にして近衛詠春の長男である近衛竜輝だ。以後お見知りおきを」
そう竜輝がしゃべり終えてから「おお、、！」や「あの近衛詠春
殿の長男、、、！」などといった声が聞こえてきた。

「それで爺、俺と闘うやつは誰だ？」

「ふむ、やはりわかっておったか」

「当たり前だ、ここで警備をする以上弱かったら使い物にならない
だろうからこういふことはするということとはわかっていた。で、誰
だ？」

「ふむそれはここにいるタカミチくんが相手を「ちょっと待ってく
ださい学園長！」「ん？」「」

自己紹介そして再開（後書き）

またしても中途半端なところで終わってしまった、、、。まあそんなことは気にせず楽しく投稿しようというのが私の自論なのであまり気にしません。

オリキャラやオリ能力はまだまだ募集しております。感想もお待ちしておりますのでどんどん送ってきてください。多分次話ぐらいで戦闘になると思いますので楽しみに待っていてください。それではっ！

腕試し（前書き）

やっと更新できた、ゝゝ。
。

腕試し

「何じゃね？ガンドルフィーニ君」

「何じゃね”じゃありませんよ学園長！あなたは自分のお孫さんを殺すつもりですか！？」

「いやいや竜輝はこうみえてかなり強いんじゃないよ？それこそワシ以上」

「だったら私自身の目で確かめさせてもらいます。いいですね学園長」

「いや最初にやるのはタカミチくんなんじゃが「僕はいいですよ学園長」、、、すまないのう、こちらから頼んでおいて」

「いえいえ、それよりも彼が学園長よりも強いつて本当ですか？」

「ああ本当じゃよ」

「、、、ガンドルフィーニ先生大丈夫だといんだけど」

そんなタカミチの祈りは戦闘が始まってから約5分くらいでぶち壊されることになる

~~~~~

「話はまとまりましたか？」

「ああ、君の相手は私だよ。ところで学園長が君のほづが強いって  
いうがそれは本当かね？」

「戦ってみればわかるでしょう？」

「それもそうか」

「じゃあ始めましょうか」

「ああ」

そういつてガンドルフィーニは右手に拳銃、左手にナイフをかまえる

「はじめ！」

爺の開始の声が広場に響いた

「さてなんの能力を使ってお相手するか」

あ、そういえば実戦でまだ使ったことがない能力があつたな、それ  
使うか

「戦闘中に考え事か？」

そういつてガンドルフィーニは持っている拳銃を竜輝に向けて発砲  
した

「、、、、、ハア！」

竜輝は向かってくる弾丸を懐から取り出した小刀で跡形もなく切り  
刻んだ

「なんだと!？」

ガンドルフィーニはありえないと思った。なぜなら自分と同じように麻帆良学園の警備をしている桜咲刹那のような剣の使い手でもあり、気の使い手でもあるなら弾丸程度切ってもなんら不思議ではないしかし目の前にいる少年からは気どころか魔力すら感じられないそんな少年が飛んでいる弾丸を切ったのではなく切り刻んだ

「くそ!!」

ガンドルフィーニはやけにでもなったのか拳銃を竜輝に向かって乱射する

しかしそれらはすべて竜輝の持っている小刀で跡形もなく切り刻まれる

「どうですか? 『<sup>レーザーカッター</sup>光? 六利』のお味は」

「『光? 六利』だと? なんだそれは! ?」

「俺の持つてる能力のひとつでしてね。この能力は、小刀の刃の部分をレーザー状にしてあらゆるものを切り刻むことができるんです。ただし、切り刻める回数は六回までで小刀自体も六回までしか使えません」

「だったら限界が来るまで撃ち続けるまでだ!!」

まあ普通はそう考えるだろうな。だからこそ、

「これで、、決める!!」

竜輝は己の身体能力を使いガンドルフィーニの懐までもぐりこむ

「しまつ、、!!」

竜輝は持っている小刀でガンドルフィーニの持っている拳銃とナイ

フを切り刻んだ

「そこまで!!」

爺の終わりを告げる声が響く

「勝者は竜輝じゃ。竜輝よ学生寮の余っている部屋の鍵を渡すから今日はそこで休んでくれ」

「ああ、わかった」

そう言い終わると爺が俺に鍵を渡してくる

「学生寮の場所はすぐそこじゃ。荷物もその部屋の中に運んでおいだ。今日はゆっくりと休んでくれ」

「わかった」

「それと悪いのじゃが明日朝早くワシのところに来てくれんかのう」

「べつにかまわないが、」

「すまない。、、ほれ皆の者、今日はこれでしまいじゃ。各自自室に戻って休んでくれ」

爺がみんなに解散の言葉をかけた

「竜輝様」

「なんだい、刹那」

帰ろうとした俺に刹那が話しかけてくる

「私も同じ学生寮に住んでいるのでご案内します」



「お、すまないな」

「いえいえ」

「じゃ、帰ろっか」

「はい」

そういつて俺は刹那の案内のもと、学生寮について自室に行きそのまま眠りについた

## 腕試し（後書き）

やっと中間試験も終わってようやく更新できました。せっかく更新できたのに駄文で申し訳ございません

今回出した能力の説明は次回の後書きで書こうと思っていますので、楽しみに待っていてください

これからはどんどん更新していきたいと思えますので応援などよろしく願います

感想や誤字、脱字などがあったら送ってください。それでは、また次回お会いしましょう

## 主人公設定（前書き）

PV30000アクセス突破！ユニーク8000突破！いよっしや  
ああああ！！！！

これからも頑張って更新していきますので応援よろしく願いしま  
す！！

## 主人公設定

名前：近衛 竜輝

性別：男

容姿：BLEACHの主人公、黒崎一護の髪の色を黒にしたような感じ

年齢：14歳

身長：175センチ

誕生日：4月14日

趣味：（能力なしで）体を鍛えること、読書、使ったことのない能力を試すこと

性格：冷静沈着で基本的にはツツコミ役。その場所の環境になれるまではツツコんだりしない。自分の好きなことになると思うが見えなくなる。身内や親友に危害をくわえられたらその危害をくわえた奴を完膚無きまでに叩き潰す

よく戦闘で使う能力：「オートパイロット反射神経」、  
「エンカ不慮の事エンカ」、  
「ウインター故」、  
「スカーデッド致死武器」

## 主人公設定（後書き）

只今アンケートを募集中です、詳しくは活動報告をご覧ください。  
皆さんのご応募お待ちしております。

## 担任との初めての会話

竜輝SIDE

朝早く起きた俺は軽く朝食を食べて部屋になぜかおいてあった制服に着替えて、『腑在証明』を使い学園長室に向かった。

〈学園長室〉

「んで爺。こんな朝早くから一体何のようだ？」

「……いきなり現れんでくれ。ビックリして心臓が止まるかと思っただぞ……」

爺は持っていた湯のみを落としそうになったが、間一髪のとこでキヤッチした。

「そんなの知らん。あんたが朝早く来いっていったから俺は来たんだぞ。」

「本当に可愛げのない孫じゃの〜」

「あんたみたいな腐れ爺にだけは言われたくない」

「まあ、とりあえず何故おぬしを呼んだのかと言つと……」

爺がそこまで言いかけると廊下から誰かが歩いてくるのが聞こえてきた

コンコン

「失礼します、学園長。少しばかり遅れてしまいました」

学園長室に来たのは昨日の夜、この爺と一緒にいた渋いおっさんだ

った。

…てか、この人って……

「ああ、構わぬよ。タカミチ君。こやつも先ほど来たばかりじゃから。」

「そうですか。それはよかった……」

「竜輝よ、彼がお主のクラスの担任じゃ。」

「はじめまして、近衛竜輝くん。僕の名前は「タカミチ・T・高畑さんですよな?」…僕のことを知っているのかい?」

「ええ、父から聞いたことがあるので。」

「たまに酒飲むとあの人は必ず酔って、『赤き翼』のことばっか話すからな。いやでも覚えるよ。」

「ナギはこうだったのだ、ラカンやアルにはこんな迷惑を掛けられたただの……」

「何回も同じ話の繰り返しだったからな。」

「ああ、詠春さんからか。懐かしいな……。ところで詠春さんは元気になっているのかい?」

「ええ、結構元気ですよ。」

「そう俺らが話していると爺が……」

「おっほん。話もそれくらいでいいじゃろ、それよりもタカミチくん。そろそろ時間じゃないのかね?」



「ああしまった。それじゃあ竜輝くん行くつか。」

「行くってどこにですか？」

「君がこれから通うことになる教室だよ。」

## 担任との初めての会話（後書き）

2ヶ月ぶりの更新……なのにこんなに短い。どうも申し訳ございません。今度更新するときは必ずや長く書きますので楽しみに待っていてください！！

それと前々回の話でた能力説明です。

『レーザーカッター  
光？六利』

自分が持っている小刀の刃の部分をレーザー状にして相手を斬ることがができる。

しかし相手を斬ることは6回までで、小刀自体も6回までしか使えないので竜輝はこの能力を使うときは小刀を懐に何本も忍び込ませている。

どうですか、こんな能力は？

他にもオリキャラやオリ能力を募集していますので、ドンドン送ってきてください。それではまた次回で会いましょう。

P.S. 最近また暑くなってきたので熱中症などにならないように気をつけましょう。

## 妹と再会そしてまた戦闘！？（前編）

学園長室から案内されて竜輝と高畑は教室にたどり着いた。

この教室には数年会っていない妹の木乃香と昨日顔合わせという名の腕試しの時に既に再会した幼馴染みの桜咲刹那がいる。そのほかにもここへ来る途中、高畑から聞いた情報によればこの教室には刹那と同じようにこの学園の警護をしている生徒が二人いるらしい。

竜輝としてはこれから一緒に仕事をしていく同僚ということになるので仲良くなつといて損はない、と考えている。

そして、この学園に来たときから感じていた自分と同じような『二オイ』。もしかすればこの学園のどこかに異常や過負荷のどちらかのスキルを持っている人物がいるのかもしれない。もし、そいつと偶然会ってしまったら戦闘になるかもしれないから注意が必要でもある。

「それじゃあ、先に僕が入るから呼んだら入ってきてね」

あれこれ考えていると高畑にそういわれて竜輝はハッ、として急いでうなずいた。

「（ガラガラガラ）みんな、ホームルーム始めるから座ってね」

『ハア〜イ』

生徒たちは返事をしてから自分のイスにすわり一時間目で使う教科書やノートをかばんの中や机の中からだして準備をする。そして高



話が変わっていき、苦笑いをする高畑。それに耐え切れず教室の外で待っていた竜輝に合図を送る。

「ええ〜とそれじゃあ、入ってきて」

高畑からの合図を受け、竜輝はドアを開けて入っていった。

SIDE 竜輝

カツカツカ、と持ったチヨークで俺は自分の名前を書き、書き終えて前を向き自己紹介を始めた。

「今日このクラスに転校することになった近衛竜輝です。よろしく  
お願いします」

『……………』

しかしクラスのみんなは反応せずに口をポカーンとあけたままの状態になっている。  
そして数秒後。

『か』

「か？」

『カッコイイイイイイイイイイイイイイイイイ！……………！』

キーン、と俺の耳の中で響くクラスみんなの声。

「（ぬああああ！！耳があああああああああ！！？）」

『アア〜んそのつり目カッコイイ!〜!』

『その目で』このメス豚が!〜!』とかいわれたら墮ちちゃいそう!』

『背が高くてカッコイイです〜』

『だね〜』

『やばい……タイプかも』

『マジで!〜!?!?』

途中のやつが危ない発言をしたのをとりあえずは無視をし自己紹介を再開しようとしたそのとき……

「兄様!〜!」

俺のことを兄と呼び飛び込んできた女子がひとり。

もちろんそれが誰だか俺はわかってる。この世でひとりしかいない俺の妹。

近衛木乃香だった。

妹と再会そしてまた戦闘！？（前編）（後書き）

新年明けましておめでとございます！！本当はもっと早く投稿したかったんですけど講習やらレポートに不備があったり、とまあいろいろあつたんです。

でもまあそんなことは置いといて、更新の遅いこんなダメ小説ですけど今年もよろしくおねがいます！！

あ、あとオリキャラやオリジナル能力はまだまだ募集中ですのでドシドシご応募ください。それではさよなら〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4558s/>

---

魔法先生ネギま ～最強最悪の転生者～ renewal

2012年1月1日00時46分発行